

都市経営研究科 都市政策・地域経済コース ワークショップ2 講演記録

日時 2020年12月4日(金)

テーマ 「現代アート入門 ― 映像編」

講師 山城大督 氏 (京都芸術大学専任講師/美術家・映像作家)

講義内容

- ・活動アウトライン
- ・「映像メディア」活動
- ・ナデガタ・インスタント・パーティー
- ・アートの評価基準
- ・映像の表現 (個人活動作品)
- ・おわりに

活動アウトライン

一般的なアーティスト像としてのアート活動ではなく、人がたくさん関わるような作品を作っている。メディアアートの作品や、インスタレーション、空間作品、映像を拡張させる作品づくりや仕事をしている。美術家と映像作家の肩書きを使い分け、現在「映像メディア」を中心に活動している。個人以外に、アーティストユニットとしても活動している。

「映像メディア」活動

映像メディアとは、映像とTVを分けるために使われる言葉であり、映像を拡張させるという意味で使われている。

現在主に4つの軸で「映像メディア」活動を行っている。

作品：美術館、芸術祭で発表

プロジェクト：映像プロデューサーとして、芸術祭参加やアーティストユニットとして活動

情報発信 (情報ツール)：映像プロデューサーとして、博物館や劇場の記録映像、YouTube Instagram など

応用：感覚のメディア (インスタレーション)、ニューメディア

応用は、関心の中心であり、今後、五感では足りない表現手法をつくっていきたいと考えている。

ナデガタ・インスタント・パーティー

2人のアーティスト 中崎透と山城大督 および1人のアートマネージャー 野田智子によるアーティストユニット（アーティストコレクティブ）として、2006年から活動。現在までに約25プロジェクトを制作。

作品：《24 OUR TELEVISION》（2010年）

アートプロジェクト。私たちのための24時間メディア。オルタナティブなテレビをつくる。会場が山の奥にある施設であったため、作品を展示するというより自分たちでTV局をつくり、地域関係なくプロジェクトを見てもらう。

今でも答えが出てないが、プロジェクトをやっていると、自分たちの作品はどこからどこまでなのか？自問自答となる。そこがナデガタ・インスタント・パーティーの作品のポイントであり、アートの一般常識からどのように抜け出せるのかを常に考えている。また、プロジェクトの枠組みはつくるが手に負えないスケールとなることを狙った作品づくりをしている。

作品：《STUDIO TUBE》（2013年） あいちトリエンナーレ 2013

中部電力の変電所跡地を使った作品。特撮撮影所スタジオチューブは、フィクションであり、フィクションストーリーをつくる。フィクションからコミュニティが生まれる、ノンフィクション化している。

プロジェクトを立ち上げるための「口実」を毎回作っている。作品は依頼があってつくることが多く、シチュエーションに対して答えを出すという作品の作り方をしている。

アートの評価基準

モダンアートや、超絶技巧からくる、技術が高いものがアートの評価軸として一般的にある。近年では、コンセプチャルアートや、技術をもたないものでも作品として評価されるアートのジャンルもできてきており、陳腐であるということも表現のひとつになるのではないかと個人的には考えている。キッチュ、ナンセンス、笑いというものも、ナデガタ・インスタント・パーティーではとりいれている。技術が高いものが美しいということが一般常識であるとは思いますが、その点でみると「なぜこれがアートなの？」というものをつくっている。アートというプラットフォームのなかで「出来事が起こっている」という作品をつくり続けている。今はまだ批評や評価が追いついていないが、20年後に価値を読み取ってくれる人が出てくるかもしれない。批評や評価はいつも後からついてくる。

コロナ禍の影響で芸術祭が軒並み中止となり、今までの常識が覆されている。常識だったことが常識ではなくなっていく象徴的な出来事である。評価や価値観は変化していく。

映像の表現（個人活動作品）

影響を受けた作家、ナム・ジュン・パイク（ビデオアートの父と言われる）の紹介。

「マグネットTV」（1965年）、「TV仏陀」（1975年）、映像の彫刻化：「ビデオ・インスタレーション」（映像のシャンデリア、モニターを人型にする作品等）。

当時、ニューメディアがファインアートや彫刻に融合できることを示した作家である。

ナデガタ・インスタント・パーティーでは映像をどのように社会の中で使っていくか、映像を使ってどのようにプロジェクトを立ち上げるかという活動をしているが、「映像メディア」がどのように拡張していくか関心があり、個人活動の作品としてつくっている。

個人活動作品：《Monitor Ball》（2020年） 六甲ミーツアート出展

ナム・ジュン・パイクの影響が濃い作品。30枚のモニターを六角形で構成。庭を閉じ込めるイメージで制作。会場空間に降り注ぐ光、音も作品の一部と考えている。

個人活動作品：《Synesthesia Garden》（2019年）

応用展開のひとつ。インスタレーション、空間作品。映像を作るときの考え方や技法を使った作品づくりを近年試みている。空間作品であるが初めと最後があり、時間軸のある作品（13分間）。この作品での映像とは、時間を構成すること、光をコントロールすることと考えている。

ナデガタ・インスタント・パーティーと個人活動作品は、質感や印象が全く違うため、同じ作家が関わっているとは思われないことが多い。様々なチャンネルが自分の中にあるため同時並行で成長させている。

おわりに

長い視点での作品づくりは勿論だが、現在の社会にも関心がある。アーティストは作家的な作品をつくるだけでなく、社会の仕組みの中を泳いだり、走ったりすることも大切だと考えている。そのこともアーティストの役割であると考えている。社会的なことを引き受けることや、社会にコミットすること等、通常のアーティストの手法ではない手法を使った活動を、あえてアーティストとしてやっていきたい。アーティストというものを拡張していく活動を今後もしていきたいと思う。